論　説

地域づくりの方法としてのシビックプライド
—その可能性と政策的関与のあり方についての検討—

渡　部　　薫

Ⅰ．はじめに：研究の背景及び目的

１．背景

近年、シビックプライドが地域づくりの一手法として活用されるようになってきている。これはもともと英国の19世紀に当時の市民たちに現れた都市を自分たちが支えているという自負を表したものであるが、最近の英国の都市再生政策の流れの中で英国政府がこの概念を取り上げたことから注目されるようになった。国内においてもこの概念をシティプロモーションや地域づくりに結びつけてその推進手段として活用するようになってきている。しかし、基本的に該当都市あるいは地域の人々がその都市／地域に対して持つ感情であることから、これを政策的に活用することについて改めて問う必要がある。

２．研究の目的

この研究では、地域づくりの方法としてのシビックプライドを研究対象とする。国内では地域づくりに関連づけた政策的な意図に基づくシビックプライドの取組みがそのあり方について議論されることなく推進されているため、それに対して疑義を呈し、概念や地域づくりの方法としての意義を改めて問い、その上で市民の感情としてのシビックプライドが地域づく

りに対してもつ可能性を追究し、問題点を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．シビックプライドをめぐる政策及び研究の状況

１．政策的取組みの現状

英国では2000年頃、労働党のブレア政権が地域に対する市民の参加意識を高揚させ都市再生の機運を高めるためにこの概念に言及、これより注目が集まるようになり、他の国々にも徐々に広がっていった。

日本国内では、建築系の領域からこの概念に対する検討が始まるが、やがて自治体の地域づくりの戦略に結びつくことになる。そこでは、エンドが地域に人を呼び込むことであり、ａ．自治体が都市間競争を戦うためのシティプロモーションの手段として活用、ｂ．地域についてのポジティブな部分を政策的に選別する傾向、というような特徴が見られる。このような政策的な取組みとは別にこの概念に注目する地域づくりも増えてきている。これについては改めて論ずる。

２．研究の現状

国内の研究動向については、必ずしも研究とまでは言えないものも含めて研究対象について整理すると大別して次のようになる(1)。

ａ．シビックプライドの源泉・要因

ｂ．シビックプライド形成方法

ｃ．シビックプライドを使った地域づくり

この３つのタイプの研究が多くを占めている。全体的に見て、現在はまだ研究上初期的段階にあるといえるが、概念についての検討は十分ではないまま、ｂやｃのように醸成・活用等の実践的な目的に関わる研究が先行して展開されており、そこでは、政策的実践のあり方、行政の関与のあり方については特に疑義も提示されていない。

３．批判的視点

政策の状況については、英国の研究者Collins（2016, 2019）が次のような批判をしている。すなわち、シビックプライドにはしばしば政治的視点が介在する可能性があること、さらにいえば、政策的意図によって利用されていること――現在の英国においては都市再生を推進するソフトなツールとして位置づけられている――に対して認識することが重要である。そこでは、シビックプライドを使ってポジティブな感情を強調することによって地域におけるネガティブな部分や問題を隠す、あるいは市民の目をそらす傾向がある。シビックプライドを論ずるにおいては、対象となる地域のネガティブな側面も含んだ多面的な議論が必要である、と論ずる。

なお、国内の先行研究については、次のⅢ章及びⅣ章において議論の展開の中で検討する。

Ⅲ．シビックプライドについての概念的検討

ここではプライドという感情についての基本的理解、関連する概念との関係について論ずることを通じてシビックプライドの地域づくりにおける意義、役割について明確にする。

１．シビックプライド概念についての基本的理解

Collins（2016, *op. cit.*）によると、シビックプライドについては、英国でも同様に十分に検討されないままに使われている。ここでこの概念について考えた場合、シビック（civic）の意義を重視すると、「対象となる地域に関わる市民としての自覚と責任感に支えられた、地域に対する誇り」と定義することができる。

もともとは、19世紀の英国ヴィクトリア朝時代に現れた概念と言われている。産業化の進展とともに都市が急速に発展し次々と建造物が作られ都市の物理的環境が形成される中で、市民階級が次第に持つようになった自分たちが都市を形作っているという自負に基づくと言われる。シビックプ

ライドは、このようなシビック性に表現される市民の地域への積極的な関与の意識が着目されて、地域づくりに市民参加を促進するためのメディアとして利用されることになる。

２．基本的には感情の一種、政策的含意をもつ

シビックプライドは政策的な含意に対して注目されるが、基本的には感情の一種であり、Collins（2017 *op. cit.*）は感情としての理解を持つことの重要性を強調する。感情は中立的な「空間」を住むための意味のある「場所」に変えるプロセスや構造を形成するもの、あるいはそれらに対応して起きるものであり、場所との関係で我々は何か、どのように生活するかという意識・態度を形作り、彩りを与えると論ずる。場所は感情の投資や結びつきによって形成そして構成されるのである。

シビックプライドについては、それがどのような心理的現象なのか、あるいは、どのような点で政治的意味を持ちうるものなのかについてはほとんど検討されていない。Collinsによると、プライドとは定義上複雑さを持つ感情である。一種の自尊心であり、自分のアイデンティティや社会的な関係を評価し讃える感情にも関わっている。また、プライドは感情であるとともに倫理的価値をも表しており、人が何を思いやり、大切に思うか、あるいは、何を目指そうとするかに関わっている。そこから、強いプライドの感情を持つ人たちは、彼らが価値を置き責任感を感じるものを思いやり、愛し、保護する行動に踏み出す傾向を持っており、それによって自分たちのプライドを強化することになる。感情には少なからず規範が影響しているが（河野 2011）、プライドはとりわけこの側面が強い。このような個人の感情としてのプライドから、集合的な感情としてのシビックプライドに対する、人々が抱く自分たちの場所や地域社会に対する帰属感や強い絆の感覚、という理解が生まれると考えられる。ここで留意すべきは、プライドの持つ規範性の強さである。そのためシビックプライドは一過性の感情ではなく、地域に対して持続的に持ちうる感情ということになる。

３．シビックプライド概念をめぐる国内の議論についての検討

概念については、国内では、前章２節・研究の現状で整理したａシビックプライドの源泉・要因について議論が展開されている。そこでは、多くの議論でシビックプライドを構成する、あるいは密接に関係する感情として、愛着、誇り、共感を取り上げている。これは、読売広告社が2007年に行ったシビックプライド・プレリサーチという調査に基づいていると思われる（杉本 2008）。しかし、そこでは、シビックプライドに対して地域づくりに市民参加を促進するためのメディアとして期待される機能に関わるシビック性が曖昧になっている。これは、「日本らしいシビックプライド」の形を模索したと述べているように（上野 2019：p.134）、意図的に除外したように思われる(2)。それに対して、シビックプライドの源泉として都市環境の要素を因子分析により分析した伊藤の調査（2017，2019）においては、愛着、参画、アイデンティティ、持続願望を主要因子として析出しており、参画という明確にシビック性に関わる要素を見出している。

感情としてのプライドのはたらきについてCollinsが論ずるように、プライド自体に規範的役割としてその当人が価値を置くものに対して積極的な行動を生み出す傾向を見ることができるため、必ずしもシビック性に特殊に強い意味を求める必要はないのかもしれない。その意味では、シビックは、「市民としてその生活している地域に対する」というような意味合いでプライドの規範性の対象として地域を指示することでシビックプライドの地域的に集合的な性格を表すと見ることもできる。

シビックプライドの概念については、都市におけるコミュニケーションを促進するメディアとしての視点、そこから地域の公共的課題・問題に市民参加を促す手段としての可能性が重要な議論になるが、これについては次章で論じる。

４．関連する概念である地域アイデンティティ、地域の価値との関係

ここでは、シビックプライドという概念についての理解を進めるために、関連する重要な概念として地域アイデンティティ、地域の（固有）価値との関係について考えてみたい[(3)]。

（１）地域アイデンティティ

Collins（2016, *op. cit.*）も伊藤（2017, 2019 *op. cit.*）も触れているように、シビックプライドは地域のアイデンティティと大きな関わりを持っていると考えられる。シビックプライドを、シビック性にこだわらず対象とする地域に対するプライドと捉えたとしても、プライド自体の意味するところから地域に対する規範的な評価を含んだ感情として捉えられ、当然地域が何かという認識に基づくことになる。したがって、人々の地域に対する認知であり、地域をどう捉えるか、自分にとってどのような存在か、どのような意味を持つのかという認識に関わる地域アイデンティティは、シビックプライド形成のための基本的要件を構成すると見ることができる。

地域アイデンティティについて個人のアイデンティティを援用して簡潔に定義すると[(4)]、地域の人々のその地域に対する共有化された認知による、地域の持つ固有性に基づく地域の自己確定となる。個人のアイデンティティは、自己についての一貫性を持った意味の体系あり、自己の存在の固有性についての意味付けである。自己における統合性と一貫性及び他者との関係における自己確定により成り立っている。地域アイデンティティにおいても基本的には同様に見ることができるが、そのための重要な根拠となるのが地域の（固有の）価値である。これが地域にとって自己としての認知を支えることになる。地域アイデンティティは、地域の人々による共有化された地域の自己認知であるため地域の主体性の基礎となりうるものであり、これが確立されることで地域づくりが大きく支えられると考えられている[(5)]。しかし、個人のアイデンティティが安定したものではなく常に自分が何かを探し確定しようと努めているように[(6)]、地域アイデン

ティティも地域を取り巻く環境が不断に変動する状況下に置かれて不安定であり、必然的に常に模索し確定しようとする試みが行われている。しかも、地域アイデンティティの場合、アイデンティティの対象となる地域に対してあまり意識を傾けない市民も多く、不安定さ、希薄さの原因となっている。

（2）地域の価値

地域の価値は、対象とする地域についてのシビックプライドの具体的な対象である。あるいは、国内の研究でしばしば論じられているように、シビックプライドの源泉として捉えることができる。地域アイデンティティの検討でも触れたように、地域の固有性、あるいは地域の（固有の）価値は地域アイデンティティを基礎付けるものであり、それゆえにシビックプライドをも基礎づけることになると考えられる。実際の取り組みにおいても、シビックプライドに関わる地域づくりでは、地域の魅力やそれにつながる価値を発掘・開発しようとする活動が多い。

心理学的に個人の心理としてのプライドについてのCollinsの議論に従うと、地域の（固有の）価値が地域の人々にとって思いやるべき重要なもの、大切なものとして感じ、評価されると見ることができるならば、すなわち、シビックプライドの対象となるならば、人々に、それを維持･保護、向上･発展、発掘・顕在化等に関与する行動を駆り立てることが考えられる。

そうして見ると、地域の価値(7)、地域アイデンティティとシビックプライドの関係については、基本的には、地域の価値がベースとなって次のような関係が考えられる。

地域の価値の認識→地域アイデンティティ再構築／再確認→シビックプライドの生成

現代の地域社会においては、上述したように地域への関心が低い市民も多く、そのため地域アイデンティティも希薄であるケースも多いと考えら

れるが、その場合、地域の価値への関与（発掘・開発等）から、地域に対する明確な認識を持たないまま直接的に、すなわち地域アイデンティティが希薄なまま、シビックプライドの生成につながることも考えられる。しかし、その場合でも、その過程で地域に対して意識が向けられることによって地域アイデンティティが少なからず活性化すると考えられる。

Ⅳ．地域づくりの方法としてのシビックプライド

ここでは、シビックプライドが地域づくりにおいて活用されることについて、その意義や問題点について検討する。シビックプライドには、地域づくり（政策）の手法としての可能性、すなわち、コミュニケーションのメディアとしてこれを通じてポジティブな心理現象を生み出すことによって地域づくりやコミュニティ活動を推進する機能が期待されるが、他方で、政策の道具として使われることに伴う問題も考えなければならない。

1．シビックプライドに関わる地域づくりの状況

国内で現在現象として見られるこのような活動を、本研究の目的に照らしてイニシアティブが自治体にあるか民間にあるかに着目して、次のように整理したい(8)。

a．自治体のシティプロモーション戦略に伴うシビックプライドへの働きかけ

b．地域の価値や魅力を発見／発掘するような市民の自主的な地域づくりに伴うシビックプライドの生成

それぞれ次のように説明を加えたい。

a．自治体のシティプロモーション戦略に伴うシビックプライドへの働きかけ

明確に政策的意図を持ってシビックプライドを掲げた地域づくりを推進

する取り組みスタイルで、シティプロモーションの手段としてシビックプライドを位置づけている。取り組みにおいてはシティプロモーションのコンサルタントと何らかの形で関わっているものも多い。行政主導という性格が強く、その働きかけによって市民の活動が形成・推進される場合、活動の展開の中で現れたシビックプライドをどう捉えるかが問われる。市民が自主的・自律的な活動を展開した場合には、次のｂとして説明するタイプと同様の動きになると考えることも出来るため、そこに現れたシビックプライドは必ずしも行政による誘導と捉えなくてもいいと思われる。ただし、その場合でも行政の意向がどのように反映されているかについては検討が必要である。

ｂ．地域の価値や魅力を発見／発掘するような市民の自主的な地域づくりに伴うシビックプライドの生成(9)

行政の働きかけあるいは介在があったとしても、基本的には市民が自主的に地域の価値や魅力を発見／発掘することを目的とするような地域づくりであり、参加している市民がこの概念を意識するしないにかかわらず、活動のプロセスの中からシビックプライドが生まれてくるケースである。最初からシビックプライドを意識する、なかには掲げる活動もあるが、多くの場合は、活動の展開の中からシビックプライドが現れると考えられる。このような活動は全国で数多く見られるが、活動のメンバーは対象となる地域に対して強い思いを抱いている場合が多く、実際に活動を展開していく中でシビックプライドに類する感情が生まれるのは無理なく想定できる。

２．地域における公共圏に市民参加を促進するための方法としてのシビックプライド

シビックプライドには、市民を地域に対して何らかの形で関与を促す、少なくとも関心を向けさせるために、人に心理的に働きかける作用を見

ることができる。シビックプライドという概念が日本国内で注目される契機になったと見られる『シビックプライド』（シビックプライド研究会 2008）という書物では、都市のあり方をデザインすることにおいて都市におけるコミュニケーションを重要視し、シビックプライドをそのプロセスの中に位置付けている。榎本（2008：p.187）は、このようなコミュニケーションのあり方を「市民を積極的に巻き込むコミュニケーション」と説明する。伊藤（2008：p.170）は、「都市が人とともに成長して行くポジティブ・スパイラルのコミュニケーション」という表現で、ともすれば都市への関心の高くない多くの市民を都市のコミュニケーションに引き込み、その展開の中でシビックプライドが醸成され、それがさらにコミュニケーションを展開させ、そのような中から都市はその都市固有の豊かさを獲得することになると論ずる。伊藤らが論ずるところを見ると、シビックプライドは地域におけるコミュニケーションのプロセスであるが、コミュニケーションを促進するメディアとしても機能しており、これへの関与を通じて地域の公共圏[10]を担う活動へ人々の参加を促す、すなわち地域づくりを促進する機能が発揮されると理解することができる。

シビックプライドのそのような機能に着目し、これを活用して地域づくりを行おうとする場合、シビックプライドをメディアとして市民に新たなコミュニケーションを開くこと、あるいはポジティブな心理現象を生み出すことによって、彼らの地域づくりやコミュニティ活動への参加を促し、活動を推進することが期待される。実際に、岩手県の北上市でシビックプライドに関わる取り組みとして推進している「まち育て」では、身近な地域資源を発見し、守り育て、発信する活動を通じてシビックプライドの形成を図っているが、そこから地域の新たな価値を創出する活動の形成・推進につながっていると論じられている[11]（北上市企画部都市プロモーション課 2019）。そこでは、具体的な作用として、地域への関心の喚起、能動的参加の促進、学習過程の展開などを見ている。

このようなシビックプライドの機能は、地域づくりにおける人々の心理

的側面から捉えたものであるが、これを意味という視点から考えてみたい。Collins（2017 *op. cit.*）は、上述のようにシビックプライドを感情として捉えることを主張するが、そこでは、意味中立的な「空間」は感情によって意味を持った「場所」になると論ずる。すなわち、対象となる地域が場所としての意味を持つことになるが、その意味とは、帰属感や絆の感覚等の地域に対する想いであり、プライドの持つ規範性からはある種の責任感も含まれることになる。シビックプライドの議論により即して考えてみると、武田（2015）は、都市計画を論ずるにおいては都市の意味的側面に目を向ける必要があるとし、これまでの都市計画においてはアイデンティティや構造は都市を形作る上で対象とされてきたが、意味の問題が十分に考慮されてこなかったと論じる。シビックプライドは、都市の形態と市民一人ひとりの意味とを結びつける手段としての役割を持っている。それによって固定的で受動的な関係性ではなく、よりダイナミックで能動的な都市と市民との関係性が生み出されることによって、都市の意味が生まれる。そしてそれが共有されるとき、都市はその目的や意義を追求できるようになる、と主張する。Collinsや武田の議論からは、シビックプライドはこのように人々が持つ地域との関係性に伴って発生する意味に関わると理解される。このような意味は、地域の人々に対して地域に働きかける、あるいは地域に関わろうとするポジティブな行動を促す心理的要因の一つとして捉えられることになる。

３．ａのケースの問題点：行政による政策的誘導によるシビックプライド

ここでは、本章１節で挙げたａのケース（自治体のシティプロモーション戦略に伴うシビックプライドへの働きかけ）について考えてみたい。

エンドとしては自治体のシティプロモーションであり、地域の魅力を作り出すために地域住民に地域づくりに参加して活動してもらうための手段として活用しているため政策的な誘導を伴うと言うことができる。水本（2019）は、自治体のコストを抑えることを目的に自治体の主導ではなく

できるだけ市民に委ねることが重要であると論じている。その上で、「活力のあるまちづくりを目指すには、まず、シビックプライドの醸成に取り組むことから始め、シビックプライドとシティプロモーションを連携させながら、両輪で回す必要がある」（*ibid.*：pp.88-9）と主張する。このような議論は、まさに行政による市民の動員として捉えられても仕方がない。これについては、行政主導の市民参加、あるいは行政の動員による市民参加という議論がある。そこでいう動員の対象は、市民の持つ自発性である(12)。一見、市民が自発的に行動しているかに見えて、実は、行政の意向が大きく作用しているということになる。

ここで問題になるのは、そのような行政主導の取組みを市民もシティプロモーションの一環としての活動として認識している場合、そのような認識のもとで市民の自発的な感情としてのシビックプライドが現れるのか、ということである。また、その場合、シビックプライド形成を狙って、行政にとって都合のいい側面しか目を向けさせない形で一方的に地域に対する思いを形成させるようなことがあったとしたら、そのようにして現れた感情は、行政の意向が強く反映されているという点で、また、シビックプライドの対象あるいは源泉として捉えられる地域の価値に市民が真に向き合ったと言えないという点で、シビックプライドとして捉えていいのかという疑問がわく。

しかし、もしこのような市民による活動が、たとえプロモーション活動の一環あるいは手段として行われたとしても、活動の展開の中で市民の自主性が獲得され、自主的な活動としての性格が出てくるならば、そこで生まれたシビックプライドは必ずしも行政による誘導と捉える必要はないようにも思われる。市民参加論における動員の議論には理想論的な市民社会を前提とした議論が見える。地域社会でいうならば、自分の生活を取り巻く地域の状況、諸問題、行政に関心を持ち、地域の自治に積極的に関与しようとする市民から構成される社会である。しかし、いうまでもなく、現実の地域社会、とりわけ都市的な地域社会においては地域に積極的に関与

しようとする市民は少ない。それどころか私的に限定された範囲以外には地域に関心を持たない市民も多い。このような状況は、1980年代の初めに奥田（1983）が地域社会の４象限モデルで示した「伝統的アノミーモデル」や「個我モデル」でいまだに多くの部分が説明されるように思われる[(13)]。そのような地域社会の現実においては、むしろ行政が適切に市民に参加の契機を提供することができるならば単純に動員や誘導として否定的に捉える必要はないのではないか。

現在全国で展開されている民間主導の地域づくりにおいては、成功例とみなされている事例でも、一部の人たちが主導して推進しているケースが多くみられる。こうした状況に鑑みると、地域の公共圏を支えると捉えられるような地域の活動には、一部の非常に能動的な市民ばかりではなく、より広範に市民が参加することが望ましいとすれば、契機としては行政の働きかけがあったとしても、それによって広範な市民の参加が実現できたとすればそれに対して意義を認めることができるのではないか。伊藤（2008 *op. cit.*：pp.170-1）は、上述のように都市のコミュニケーションを重視し、その一環としてシビックプライドの生成がそのような幅広い人々に対するコミュニケーションを促進するとして、市民参加に対して持つ意義を主張する。

また、行政が主導したとしても、それによる地域づくりが参加する市民の自主性、自律性が獲得され市民の自主的な活動として展開されて行く場合、その活動の展開の中で何らかの学習過程を経ることによって必ずしも地域に対するポジティブな評価ばかり生まれるとは限らない。地域に対する感情がプライドとして明確化される前に、地域の問題への関心の喚起や過去についての反省が強く出てくる可能性も考えられる。

４．地域の価値、地域アイデンティティとの関係、再考

シビックプライドを手段として推進される地域づくり活動においては、シビックプライド醸成を目指してその源泉となる地域の価値の発掘・顕在

化等の活動を伴い、地域アイデンティティもそれに伴って再構築が展開すると考えられる。その場合、Ⅲ章４節で示した図式（地域の価値→地域アイデンティティ→シビックプライド）とは逆に、シビックプライド→地域アイデンティティという関係が生まれる、あるいは、少なくとも地域アイデンティティの覚醒を経由せずにシビックプライドが生成されることになる。

シビックプライドの概念から考えれば、自分たちが生活し活動する地域が何かという認識に関わる地域アイデンティティはシビックプライドの形成に大きく関わってくると考えられるが、地域アイデンティティが希薄な場合は、このようなシビックプライドを生み出そうとする活動が地域の価値に目を向けることを通じて地域自体についても関心を向けることになり、それによって地域アイデンティティに働きかけることが想定される。このような場合、地域アイデンティティが明確になる前に、あるいはそれと同時にシビックプライドは登場することになる。地域アイデンティティ自体が個人のアイデンティティと同様、安定的･固定的なものでないため、特に異例のことではないかもしれない。運動論として考察した場合、地域の価値の発掘・顕在化やシビックプライドの出現が触発して地域内で自分たちの住んでいる地域についての認識をめぐって議論が起こる等の状況が現れ、個々の市民の地域アイデンティティが覚醒化され、そこからコンセンサスの得られる地域アイデンティティが生まれる状況を導くと考えることもできる(14)。この場合問題になるのは、シビックプライドが行政の誘導によって形成され、しかも行政の意向が反映されている場合、地域アイデンティティにも影響を及ぼす可能性である。

５．シビックプライドの対象となる地域の範囲

自治体の主導ではなく民間主導であれば、地域づくり活動は地域全体、例えば自治体の行政範囲全体に関わることは珍しく、多くの場合は地域内の一地域になることが多いが､自治体を超えて活動が行われる場合もある。

そうした場合、このような活動から生まれたシビックプライドは当然ながら活動の対象としている地域に関わるものになり、活動範囲に応じて地域内における局所的なものにもなれば自治体の行政範囲を超えて広がる地域に対応するものにもなる。

６．政策あるいはプロセスのあり方の重要性

以上のような考察からは、シビックプライドは地域づくりにおける市民参加の手法として人の心理的側面に働きかけることによって活動を促進する有効な方法と評価することができる。しかし、同時に、ａの自治体がシティプロモーションの手段としてシビックプライド形成を誘導するケースに見られるような政策的介在を伴う場合、市民の心理的側面が行政による一種の管理を受けることになり、市民の感情としてのシビックプライド自体が影響を受けるだけでなく、地域アイデンティティへの影響等、その活動にとどまらない影響の問題が生じる可能性が指摘できる。

そのため、政策的介在を伴う場合、市民による地域の公共圏形成につながる地域づくり、あるいはコミュニティ形成のための活動として評価できるかどうかについては、具体的にどのような方法をとり、どのようなプロセスで運営されるのか､活動はどのように行政からは距離を置いているか、どのように自律性を確保しているか等について、慎重に検討する必要がある。

Ⅴ．事例の検討：東京都多摩市の取組み

以上の議論に基づいて、地域づくりにシビックプライドが活用される事例を取り上げ、検討を行う。そこでは、主要な論点として次の２点を問う。Ａ．シビックプライドは公共圏に市民参加を促進するためのメディアとしてどのように機能するか、Ｂ．行政が誘導した場合、そこに現れるシビックプライド、あるいはそれに類する感情は自発的なものか。すなわち、シ

ビックプライドが市民による地域づくりを推進するために貢献するのか、そうである場合、それは行政の意向とはどのような関係にあるのかを問うのである。ただし、論点Ａでは公共圏への市民参加の促進としているが、理念的には幅広い市民参加の促進が期待される。しかし、Ⅳ章３節で奥田の４象限モデルを引用して論じたように、現代の地域社会の現実を考えればシビックプライドというあくまで一つのメディアのはたらきのみによって「幅広い」市民参加を促進できると考えるのも過大な期待であると思われる。それを到達すべき目標として留意しながらも、論点としては、そのための一つの貢献として市民参加への促進にとどめるものである。

本稿では、自治体が政策的意図をもって推進あるいは活用するシビックプライドについて、行政の関与のあり方や地域づくりにもたらす可能性を検討することに研究の焦点を置くため、事例としては、ａ．自治体のシティプロモーション戦略に伴うシビックプライドへの働きかけ、というタイプを取り上げる。自治体の政策としては、地域の魅力を作り出すことを目的にシビックプライドを用いて地域住民の地域づくり活動を政策的に誘導するという側面があったとしても、その中からどのような市民の活動が展開するのかを追究することになる。ここでは、事例を取り上げ上述の論点を中心に検討を加えるが、あくまで一事例にすぎず、地域づくりにおけるシビックプライドの可能性についての仮説的な知見を得ることを目的とするものである。

取り上げる事例は、東京都多摩市の地域づくりの取組みであり、その取組みの一環として始まった多摩市若者会議という活動である。多摩市は、2021年５月現在の市長である阿部裕行氏がシビックプライドの活用に積極的で、シティプロモーションには市民の参加が必要であり[(15)]、そのために市民がシビックプライドのような思いを持つことが重要であるという認識を持っている。そのような市民参加の活動として、とりわけ若い人たちをターゲットとして始めたシティプロモーションにつながる取組みが多摩市若者会議である。なお、若者会議への参加者は多摩市に関心があること

が前提だが、市民に限ってはいない。

１．事例の概要

（１）多摩市の概要

多摩市は、人口14万８千人（2021年５月18日）を擁し、地理的には東京都の西部・多摩地域にあり、東西軸ではほぼ中央、南北軸では南部に位置する、地域のタイプとしては基本的には東京都心部の郊外型住宅地域である。

図１：多摩市の位置

出典：「多摩市」、Wikipedia

多摩市を大きく特徴づけるのは日本最大規模を誇る多摩ニュータウンである。都内で良質な住宅や宅地を大量に供給することを目的に開発されたこのニュータウンは、稲城市、八王子市、町田市にもまたがっており、多摩市においては総面積の約60％を占めている。ニュータウンでは、住宅だけではなく、業務、商業、教育、文化などの施設も立地しており、一つの町としての必要な機能を備えている。そのため、郊外ベッドタウンという

イメージはあるが、実際には、昼夜間人口比率はほぼ１である。市内にある多摩センターは、多摩地域における複合的地域機能拠点となっている。

多摩ニュータウンの開発が始まった当初の1960年代後半は、多摩丘陵に位置する人口１万人程度の町であったが、ニュータウンの開発とともに都市化し、当時子育て世代であった団塊の世代を中心に人口が急増した。しかし、1971年の最初の入居から50年ほどたった現在、ニュータウンの高齢化とともに市全体の高齢化が進んでいる。

（２）多摩市若者会議

①設置の背景及び目的

市の人口の高齢化の中で若い世代の人口減少を抑制するための取組みとして、2017年に多摩市の事業として開始されたものである。多摩市では、上述したように急速に高齢化が進む一方で、若い世代については多摩市及び近隣自治体に多く立地している大学等の教育研究機関のため市内への一時的な転入があるものの定着せず、全体として減少が進んでいる。そのため、地方創生の一環である多摩市まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定において、若い世代の人口減少を抑制していくための取組み（転出の抑制、転入の促進）が急務であるとして、若い世代が「訪れてみたい」「住んでみたい」と思えるような魅力の創出・発信を目的として、多摩市にゆかりのある若者が一堂に集える場としてこの活動が設置された。

このような目的から、若者会議という事業自体はシティプロモーションの一環であると捉えることができるが、多摩市としては、市全体のまちづくりの方向性として若者にとって魅力のあるまちづくりを目指していたため、若者の視点をまちづくりに活かすという意向の方が強かった。しかし、若者会議自体が多摩市の魅力であることが強く認識されるようになり、シティプロモーションとしての位置付けが次第に高まっていった[(16)]。シビックプライドについても、当初は目的には含まれていなかったが、市長が地域づくりにおけるシビックプライドの意義に強く関心を持つようになった

こともあり[17]、活動の展開につれて結びつけられるようになった。

②参加者

多摩市は、ホームページ等を通じた広報や近隣大学への呼びかけ等によって参加者を募り、市が事業として推進した約３年間の期間においては、延べ総計735名の参加者があった。市内外の大学生及び39歳以下の若手社会人に参加を呼びかけ、結果的に参加した人たちは、平均年齢は27.8歳、構成は学生４割、会社員・自営業４割、公務員２割となっている。また、居住地は、多摩市内在住３割、市外７割である。参加者の中に活動の中心となるメンバーとして実行委員（コアメンバー）を設けている。

多摩市の事業としての若者会議は2019年度で終了したが、それ以降も活動自体は希望する参加者によって自主的に継続されており、2020年12月の調査時点で70人が参加者として登録されており、そのうち20名ほどが中心となって活動している。

③活動概要

活動は、主に会議とフィールドワーク、プロジェクトの実施から構成される。会議では、多摩市が選んだファシリテーターのアドバイスを受けながら、多摩市の魅力をどう捉え、どう創出し、どう発信するかについて、「多摩市は魅力のあるまちか？」、「若者が集まる理想のまちとは？」というようなテーマについてワークショップ形式で議論を重ね、市への提案を行い、その中からプロジェクトを実施している。主なプロジェクトとしては、未知カフェの創設、多摩市内の公園・遊歩道の活用を目的としたGoogleストリートビューの撮影、多摩中央公園プレイスメイキングの社会実験等がある。その他市内外の数々のまちづくりイベントにも参加している。未知カフェは、若者会議の活動の拠点を設けるとともに地域における新たな交流の場を創るという趣旨で創設したもので、その中で数々のイベントも実施している。未知カフェの整備には、クラウドファンディングを活用し自分たちで資金を集めている。事業期間終了後も活動を継続させるため、活動

を支える運営組織としてコアメンバーによって合同会社MichiLabが設立されている。

２．調査

（１）調査方法

若者会議のメンバーを対象にした半構造化インタヴューによる聞き取り調査を行なった。インタヴューは、2020年11月19日から12月28日にかけて調査対象者７人に対して、zoomを使って１名につき30分から１時間半で行なった。インタヴューは､本人の希望に従って５人に対しては１名ずつ、それ以外の２人に対しては２人同時に、自宅あるいは未知カフェで実施した。

インタヴューは、シビックプライドの現れ方やその活動への影響、行政の関与の仕方等について把握することを目的として、活動への参加の動機・契機、多摩市に対する思い・認識・評価とその変化、シビックプライドやそれに類する感情・思いの発生とその活動への影響、自分たちの活動に対する評価等について、事前に送付した質問項目に沿いながらも、調査対象者の活動への関わり方や地域との関係等に対応して柔軟に質問を展開した。質問項目においては、中心的な問いであるシビックプライドがもたらすと考えられる影響についての直接的な問いは、回答への影響を考慮して避けた。

（２）調査対象者

調査対象者の属性は表１の通りである。調査への自発的な協力を重視し現在の若者会議のメンバーから調査対象者を探したため[18]、コアメンバー、すなわち実行委員経験者が多くを占めている。そのため、調査には、多摩市／多摩ＮＴあるいは、若者会議という活動に対する思い入れが強い人たちの意見が強く反映される結果になったと解釈される。住所は、多摩市あるいは多摩ＮＴ外の人もいるが、いずれも東京都である。

表１：調査対象者の属性

表示はインタヴューの実施順による

	年齢層	性別	学生／社会人	住所	コア／一般	活動開始年
A	40代*	男性	社会人	八王子市	コア	2017年
B	30代	男性	社会人	多摩市	コア	2017年
C	30代	男性	社会人	多摩市	一般	2020年
D	20代	男性	社会人	多摩市	一般	2020年
E	20代	男性	学生	荒川区	コア	2017年
F	20代	男性	学生	多摩市	コア	2017年
G	20代	女性	学生	武蔵村山市	コア	2017年

*当初参加した当時は30代

（３）調査結果

①活動への参加の動機と多摩市／多摩NTに対する思い・認識等の変化

活動への参加については、コアメンバーでは、多摩市あるいは多摩ＮＴに対する愛着や関心が重要な動機付けになっているが、コアメンバーの中で地域外からの参加者及び一般メンバーにおいては、活動自体への興味が大きな動機となっている。今回の多くの調査対象者においては多摩市や多摩ＮＴに対する思い入れや関心が重要な動機付けとして現れたが、インタヴューでは、学生の参加メンバーにおいては、地域への関心よりも活動自体への興味で参加した人が多いように感じられたという意見もあった。

若者会議は、地域内外の人たちに地域の価値をアピールすることを目的とする活動を通じて、参加者においては地域への興味・関心や愛着、誇りを高め、さらにはシビックプライドの醸成につなげようとする意図もあったが、調査対象者は多くがコアメンバーであったため、そもそもそのような愛着や興味･関心、そして自分の町という意識を少なからず持っていた。他方で、一般メンバーＣ、Ｄはそのような気持ちは当初持っていなかった。活動を行なっていく中で、具体的に地域の今まで知らなかった部分に触れたり、活動がなければ知り合えなかった人たちや、地域内の市民活動団体

と交流したりすること等によって、多くの調査対象者は地域に対する思いや意識が高まっている。ＥやＧは多摩市民でも多摩ＮＴの住民でもなく、Ｅは「自分の町でもなく当初は地域への関心は低かったが（活動自体に関心があって参加）、活動を通じて自分も住んでみたいと思うようになった」と話し、Ｇは通学している大学の所在地であるため参加したが、第二の故郷のように感じるようになったと話す。Ｂは、より積極的に地域をこう変えたらいいのではないかという気持ちが強くなったという。また、他地域から移住してきたＤは、当初多摩市民としての意識は希薄だったが自分も市民なのかなという意識を持つようになったと話す。総じて、地域に対するポジティブな姿勢、自分の町という認識が強まっている。

②シビックプライドの発生

多摩市／多摩ＮＴへの思い・感情について、上述したようにシビックプライドの構成要素として研究上しばしば取り上げられる愛着、誇り、共感という言葉で語ることができるかについて質問したところ、意見は別れた。コアメンバーの人たちは、愛着、共感のどちらを強調するかにおいては異なるものの、いずれも肯定的な回答をしている。それに対して、一般の参加者Ｃ、Ｄは、二人とも否定している。その根拠としては、行政に対するイメージ、若者が活躍していない現状を挙げている。

このことは、より端的にシビックプライドについて質問したところ同様の結果になった。もともと多摩市や多摩ＮＴという地域に対する思いが強いＡやＢの場合、「誇りというのは元々あったが、責任を持ってまちに対して行動はしていなかった。まちの抱えている課題に対してどう行動したらいいかというように変わった」、「活動に参加してみて、それまでは地域の課題に対してどうして行政が対応できないのかなという思いを持っていたが、じゃあ、市民としてどう変えていったらいいか考えるようになった」と語っている。地域に対する市民としての自覚、責任感が出てきた、あるいは、それを認識したと解釈できる。シビックプライドの要素としてのシビック性を窺うことができる。他方で、学生に多いケースとして地域外か

ら来ている人たちの場合は、地域ではなく活動自体に興味があり参加しているのであって、地域に対してはそのような感情を持たないのではないかという意見もあった。ただし、Ｅの場合は、この地域の住民ではないが、若者会議を通じて地域の人と関わり、多くの活動を経験することによってこの地域に対してシビックプライドと同様と思われる感情を持つようになったと話す。一般参加メンバーのＣ、Ｄの場合は、これについても否定的である。Ｃについては､行政（多摩市）が若者会議の活動を通じてシビックプライドを醸成しようとしているということも耳にしていたので、そういうのは好まない、行政の思うようにはなりたくないと語っている。他のメンバーにも多摩市のシビックプライドに対する意向に気づいている人はいたが、そのことについては特に問題にはしていなかった。

なお、インタヴュー中、愛着、誇り、共感についても、シビックプライドについても明確な答えがすぐには出てこないケースもあった。普段意識していない思い・感情について質問しているためであると思われるが、他の調査対象者においても心理的には同様の状況であったことも考えられるため、無理やり答えを引き出してしまった可能性も否定できない。

シビックプライドの形成を意図する活動では地域のプラスの面に焦点を当てる傾向が指摘されるが、地域の負の側面に対しても目を向けてきたかという質問には、多くの人がそのようにしてきたと回答した。例えば、多摩市や多摩ＮＴのまちづくりにおいては、高齢化のような問題は避けて通れないため、それに向き合い、どう対応したらいいか考えたと答えている。

③活動の自律性とポジティブな感情の活動への影響

若者会議という活動に対して多摩市の意向としてシティプロモーションの一環として位置付けていることについては、多くの人は広報等を通じて当初から知っていたが、そうでない人も活動の中で気づいている。これについてＦは、「重々承知の上であり、市の意向も理解できるので裏切られたということはない」と語る。そのような市の意向・戦略が活動に関与しなかったか、活動は自律的だったかという点については、多くの人は特

に関与はなかった、自律的だった、自分たちで活動をやってきたと答えている。Bは、「自分たちの自律的な活動だったからこそ意味があり、だからこそ今でも続いている」と話す。Eは、「多摩市からは干渉がなかった。むしろ、自分たちの提案に対しても協力的だった」と多摩市の関わり方を評価する。それに対してFは、活動の自律性について、「全てがそうだったとは思わない、例えば、未知カフェの整備などは参加者の総意というよりファシリテーターの意向に沿ったものであった。しかし、活動の展開の中で自律性が高まっていったということはできる。市が2019年度の事業終了後も続くとは思っていなかった活動が今でも続いていることを見ても自律性が確認できる」と説明する。

シビックプライドがその後の活動の展開にどう影響を与えたかについては、回答への影響を考慮して直接的な質問は行わず、地域に対して生まれたポジティブ・積極的な感情の影響として質問した。全ての調査対象者が影響を肯定的に評価する。具体的には、若者会議が市の事業終了後も続いていることを影響として見ている。また、自分自身が活動を続けていることについてもそう捉えている。「何か自分たちでやれるのではないかという気持ちが出てきた、自分自身がこのような活動の舵取りをしたいという気持ちになったことに現れている」という声もあった。Fは、「地域に対するポジティブな感情、特に愛着が強くなったからこそ活動は続いている。自分にとっては、活動が続いていることの要因としては、活動することの面白さもその一つだが、そのような一種の自己実現が3とすれば、地域への貢献・責任が7という割合だと思う」と説明する。

④その他の主要な発見

若者会議についてのレポート（TAO 2020）や多摩市の担当者も触れているが、2019年に設置された未知カフェはメンバーにとっての重要な活動の拠点となっており、多くの調査対象者がその役割を評価している。会議を行ったり、メンバーが自由に集まったり、プロジェクトを企画・実施したりする場としての役割を果たしている。地域の交流の拠点としても期待

されており、「地域の人たちがふらっと寄ってきてそこでつながりが生まれ、そこから何か（プロジェクト等）が生まれたらいいなと思っている」という声もある。現在はまだ認知度が低く地域の若い人たちを結びつける場としての役割については今後の課題であるという指摘もあった。

Ⅵ. 分析・考察

ここでは、Ⅳ章の議論に基づき事例の調査結果に対して検討を加え、自治体が政策的意図をもって推進あるいは活用するシビックプライドについて、前章Ⅴの冒頭で取り上げた２点の論点を中心に分析・考察を行う。

まず、シビックプライドが生成されたか——自治体が好んで使う表現を借りれば醸成されたか——という問題については、明確に答えを得たとは言えない。この概念が一般的に理解されたものではないため、調査対象者は質問されることで自分なりに解釈して近いと思われる感情を適用して回答したと考えられる。それを確認するためにも、ポジティブ・積極的な感情、愛着・誇り・共感という言葉でも質問をした。それらに対する回答を総合すると、明確にシビックプライドとは言えないまでも、それに類する感情、地域に対して積極的に関わっていこうとするポジティブな感情が発生したことは確認できる。

シビックプライドの発生に対する自治体の関与については、多摩市の事例からは、当初は自治体がイニシアティブをとって始めた活動だったとしても、その活動が展開していく中で、活動の参加者の個人的な感情として、シビックプライド、あるいはそれに類すると見られる感情が自発的に生まれている。ここで重要なのは、若者会議という活動が多摩市の事業期間終了後も参加メンバーの自発性により新たな形で継続したことである。コアメンバーによって活動の継続性を支えるために若者会議の運営組織としてMichiLabという合同会社を設立している。若者会議が継続することは多摩市も予定していなかったことからも、参加者の自発性を読み取ることがで

きる[19]。若者会議のメンバーは、自分たちの活動が多摩市においてはシティプロモーションの一環として位置付けられていることも活動を通じてシビックプライドの醸成を意図していることも認知しており、それに対する反感も見られるものの、自分たちは自発的に活動を展開し、継続を選択したと捉えている[20]。行政の意向を自覚した上で、行動し、シビックプライドに類する感情も生まれているのである。たとえそのような感情を生み出すことが多摩市の意向にあったとしても、あるいはある種の誘導があったとしても、感情の内容自体は自治体の意向とは関係なく形成されたと解釈できる。その意味において、若者会議の活動は、Ⅳ章１節での分類に従えば、ａ. 自治体のシティプロモーション戦略に伴うシビックプライドへの働きかけとして始まったとしても、ｂ. 市民の自主的な地域づくりに伴うシビックプライドの生成へと転回したと見ることができよう。

これに関連して、シビックプライドの生成プロセスにおける自治体の関与の仕方について付け加えたい。自治体がイニシアティブを取っている実際の取り組みについては、調査を行なった多摩市においては初期の段階ではある種の方向づけがあったとしても、また、ファシリテーターを使って技術的な指導を加えたとしても、基本的に活動の舵取りは参加者の意思に任せ、彼らの自発性を生み出すような方法を取っている。行政としては側面支援という立場である。また、北上市の場合も、まち育てという考え方を用いて市民の自主的な活動にまちづくりを任せようとするものであり、同様に行政の関与は控え市民の自発性を引き出そうとしている。

シビックプライドあるいは地域に対するポジティブな感情の地域づくり活動への影響については、調査結果からは一見すると肯定的な影響があったように捉えられる。しかし、若者会議の活動が継続したことについては、活動自体に対する興味からも説明できるため、シビックプライド等の感情が作用したとしてもどの程度寄与したのかは定かではない。これについては後ほど改めて議論したい。

地域アイデンティティについては、明確にこの言葉は使わず、「自分の

町という認識」として質問したが、若者会議では活動を通じて自分の町という認識は強くなっている。これをそのまま地域アイデンティティとして捉えることには慎重であるべきだが、地域への関心の高まり等、地域に対して意識が向けられようになっていることから、地域アイデンティティに近い認識が強化されていると見ることはできる。地域アイデンティティとシビックプライドの関係については、両者ともに一般的には日常的には意識されているものではなく、調査対象者は質問を受けて地域に対する感情・思いを整理することで地域アイデンティティ、シビックプライドそれぞれを認識しているため、両者の明確な関係を捉えることは困難である。地域の価値との関係については、活動の主な目的がその発掘やアピールすることであったため、そこからシビックプライドの生成や地域アイデンティティの確認／再構築が導かれたと見ることができる。すなわち地域の価値の認識→シビックプライドの生成、あるいは地域の価値の認識→地域アイデンティティの確認／再構築という２つそれぞれの図式は見ることができるが、両者の交差は確認できない。若者会議の活動では、当初より行政の関与は少なく活動の展開の中で自律性が取得されていったこともあり、シビックプライドと同様、政策的に地域アイデンティティが創り出されるということはなかったと解釈される。ここで一つ言えるのは、シビックプライドの生成と地域アイデンティティの確認／再構築の間に直接的な因果関係は認められないとしても、両者は同じ活動から同時に起きる可能性があるということである。

調査からは、活動の中で設置した未知カフェという存在がその後の活動の重要な拠点としての役割を担っていることが指摘されている。社会的活動の形成、推進においては、活動の構成要素として意味、機能、構造から捉える視点があるが[21]、これに従えば未知カフェは構造を担っていると考えられる。先ほどシビックプライドのような感情がどこまで地域づくり活動としての若者会議の継続性に影響したかについては定かではないとしたが、この視点を援用して改めて地域づくりにおける感情あるいは心理的

側面の役割について考えてみたい。Ⅳ章２節で見てきたように、武田（*op. cit.*）は都市計画においてはアイデンティティや構造は都市を形作る上で対象とされてきたが意味の問題が十分には扱われず、シビックプライドはそのような意味の側面を担うことが期待されると論ずる。活動の要素としての意味・機能・構造のうちの意味の部分を担うことになる。具体的には活動することの動機付けや意義を提供する。機能については、何らかの社会的価値を生み出したり、提供したり、あるいは支えたりするような実際の具体的な働きとして、構造については、機能のあり方を規定するとともに現実化する・支える役割を果たすとして説明される。若者会議という活動について意味・機能・構造という分析枠組みを使って検討すると、意味はシビックプライドのような感情が充足し、機能は地域の価値の発掘・開発及び発信という具体的活動によって発揮され、そのような活動を未知カフェのような構造が支えるということになる。なお、構造については、若者会議という場自体が重要な役割を担っており、それを空間的に支えるのが未知カフェと捉えることもできる。活動の推進及び継続にとってシビックプライドのような意味の部分は重要だとしても、機能や構造を伴って初めて意義を持つのである。

若者会議という活動の要素としての意味について、先ほど保留にしたシビックプライド等の感情の地域づくり活動に対する作用について見解を明らかにする意味でも改めて検討したい。参加する個人の活動の動機付けあるいは意味としては、大きくは、参加して活動すること自体、すなわち自己実現欲求の充足と地域に対する貢献を上げることができる(22)。このうち後者にシビックプライドのような感情が関わることになる。調査対象者の一人が明確に答えているように、参加者個人は、必ずしも一つの意味だけで参加・行動しているのではなく他の意味も同居していると見るのが妥当であると思われる。そのことは認めつつも、この調査対象者がそうであるように、また若者会議という活動自体の目的からしても、地域に対する貢献を活動の意味として重視している参加者も多いと解釈することができ

よう。そう捉えると、活動を通じてシビックプライドのような地域に対するポジティブな感情が生成あるいは高揚するならば、地域づくり活動に対して一つの推進力として働く可能性を十分に見ることができる。

ここでシビックプライドという概念について地域づくりに対する作用という点から改めて論じると、地域に対するポジティブな思い・感情というものによってそのような作用が説明できるのであれば、ことさらにシビックプライドにこだわる必要はないのかもしれない。このように考えると、シビックプライドという概念について定義を明確化することにはさして意味はなく、地域の公共圏構築への参加をもたらすような、地域に対する一つのポジティブな感情として理解することに意義があるようにも思われる。そうであれば、シビックプライドは、そのような感情の役割を見るための象徴的な概念として捉えられることになる。しかし、地域づくりの推進力としてはそのような側面が大きいかもしれないが、シビックプライドには地域に対して地域のメンバーとしての自覚と責任を認識させ、それによって地域に対して積極的に働きかける行動を生み出すあるいは促進するという意義があるとすれば、単純にポジティブな感情として地域づくりを推進する力になるというだけでは説明できない役割があることにも留意すべきである。これについては、ここではこれ以上追究できないが、改めて検討すべき問題である。

以上を整理して、前章Ⅴの冒頭にA、Bとして上げた主要な論点について検討したい。シビックプライドにコミュニケーションのメディアとして期待する地域の公共圏に市民参加を促進する役割については、この事例では、地域づくりの活動に参加した人たちにおいてシビックプライドに類する感情がその後の活動を推進したということができる。ただし、理念的に期待される幅広く市民参加を促進するというのには直接的には該当しない。この事例の調査結果から知見を引き出してシビックプライドがより広範囲にわたった市民参加を促進する可能性について検討するためには、若

者会議の経験について次のようなことを分析しなければならない[23]。若者会議に参加した人たちは市民の中のどのような人たちなのか[24]、若者会議の活動がその中での相互作用を含め特殊な要素を持った活動だったのか、あるいは、より一般化できる部分が大きい活動だったのか、その場合はどのような条件が関わっているか等。これらを検討するためには、若者会議の活動についてのさらなる調査及び別の事例を併用した調査を行う必要がある。

シビックプライドの被誘導性、すなわちシビックプライドあるいはそれに類する感情が推進する活動が行政の意向から独立しているかという点については、行政のイニシアティブで始まった活動であったとしても行政の意向から離れて市民が自発的・自主的に活動を推進・展開することは十分に可能である。その場合、行政の活動に対する関与のあり方、距離の取り方が重要になってくる。

Ⅶ. おわりに

本稿は、シビックプライドについて概念や地域づくりの方法としての意義を問い、地域づくりに対してもつ可能性と問題点を追究した。その結果に該当する部分は、既に前章の最後に論じているので、ここでは、そこから得た示唆と今後の課題・問題点について論じたい。

シビックプライドが地域の公共圏に市民参加を促進する役割をどう見るかということが本稿の中心的な論点だったが、事例を使った調査では「幅広い」市民参加の促進については直接的には答えを得ることはできなかった。しかし、シビックプライドに期待される心理的作用は活動の促進要因として働いた調査対象の地域づくり活動に限定されるものではなく、シビックプライドが生成されるような機会を広げることによってより広範囲に市民参加を促進する可能性を見ることはできる。ただし、事例調査ではその心理的作用としてもシビックプライドとは特定できず、地域に対する

ポジティブな思い･感情として分析した。シビックプライドという概念は、地域づくり活動の推進という役割については、そのような思い・感情の役割を代表する象徴的な概念として理解される。これについて活動の構成要素としての意味・機能・構造という視点から考えてみると、シビックプライドが注目されるのは、従来地域づくりにおいては主に機能や構造に目を向けてきたのに対し、意味の部分は十分に扱っていなかったことに気がついたからであると考えられる。英国でシビックプライドが都市再生の文脈で光を当てられたのは、都市再生を望ましい方向に進めていくためには都市形成における意味の部分が市民の認知・精神面に働きかけることが必要であるという認識が現われてきたからである(25)。日本国内においても地域の文化プロジェクトについて、文化の持つ意味作用によって地域の人々の認知・精神面に影響を与えることが、地域づくりの推進、あるいは地域コミュニティの活性化をもたらしているのではないかと論じられている。その点において、地域づくりにおけるシビックプライドの持つ可能性を検討することは、今後の地域づくりの一つの方向性を開くことにつながることも期待される。

本研究では、事例調査に絡んで課題・問題点も見出された。シビックプライドがコミュニケーションのメディアとして期待される幅広い市民参加を促進する役割については、上述したように調査で得られた個別の活動への影響からその可能性を推論するしかできなかった。この役割について直接的に明らかにするためは、若者会議を改めて調査対象として活用する場合は前章で論じたような若者会議についての分析及び新たな調査を行うことが求められるが、それとともに既に地域内に醸成されているシビックプライドを取り上げ、それが地域づくり等への市民参加にどのような影響を与えているかについて調査することも必要であろう。また、本研究は仮説的な知見を獲得することを目的としていたため、調査は調査対象者一人につき１回の調査で完了した。そのため、シビックプライドの生成、その地域づくり活動への影響、シビックプライドと地域アイデンティティとの関

係、シビックプライドについての明確な認識等、調査対象者の心理を、それに影響を与えることなく正しく掴むことが求められる論点については明確な答えが得られなかった。これを得るには、質問内容の工夫とともに、場合によっては参与観察を含む、調査対象との長期的で密接的な関わり方を伴う調査が求められると考えられる。今後の課題としたい。

【注】

（1）2021年５月31日、CiNii Articlesにおいてシビックプライドを論文検索した結果による。

（2）この調査では、シビックプライドとまちのイメージとの関係、居住者の住み続けたいという継続居住意向、人に勧めたいという推奨意向との関係を明らかにすることも目的となっている。

（3）牧瀬（2019）は、類似する概念としてコミュニティ論、市民参加論・協働論、ソーシャル・キャピタル論を挙げているが、正しくは概念としてというより議論の文脈において重なりやすく、議論の方向性において共通の部分があるというべきであろう。ただし、ソーシャル・キャピタル論については、かなり異なる文脈での議論もあるため、その点では誤解を招く可能性がある。

（4）地域アイデンティティあるいはローカル・アイデンティティを定義するのは簡単ではない。対象となる地域に対する個人的レベルと集合的レベルのアイデンティティがあるからである。両者の関係をどう見るかについては、様々な議論がある。個人的レベルの地域アイデンティティは基本的には地域の何らかの要素が個人の自己アイデンティティの構成要素となっているものであり、集合的レベルは地域自体を自分たちの地域としてどう見るかという認識に関わるものと捉えることができる。その場合、単純に個人レベルが集合化されたものが集合的レベルの地域アイデンティティにはならない。本稿では、地域アイデンティティ＝集合的レベルの地域アイデンティティとして扱うが、そのような個人的レベルの地域アイデンティティとの関係は考慮外として、個人が地域に対してもつ認識の共有化される要素に基づいて集合的に現れるものとして理解する。そこでは対象となる地域をどう捉えるかということも考慮しなければならない。個人によって地域の捉え方は異なるため、地域の人々の間でどの程度に認知が共有化されて集合的なレベルでの地域アイデンティティが構成されるのかという問題が出てくる。なお、個人的レベル、

集合的レベルの議論については、大堀（2010, 2011）、渡邊（2008）を参照している。

（5）これについては、Miles（2005: p.923）を参照されたい。

（6）Ｉ.ゴフマン（1959）のような戦略的に操作し管理する対象として捉える見方やＳ.ホール（1996）のような変化・変形のプロセスとして捉える見方があるように、アイデンティティを構成する他者との関係における自己確定も自己における統合性・一貫性も安定したものではなく、不断の努力によって実現が目指されるものと理解される。

（7）地域アイデンティティについて説明したように、地域に対する意味づけにおいてはその固有性が重要となるため、地域の価値において固有性は強調されることになる。したがって、地域の固有性は本稿の文脈で地域の価値に言及する場合、既に織り込まれていると見るべきであり、以降は固有という表現は省略する。

（8）厳密にはこの分類に入らないものも見ることができる。例えば、地域の価値転換あるいは構造転換に伴ってシビックプライドが醸成されるような地域づくりが考えられる。これは地域の経済構造等の転換に伴い従来該当地域にはない価値を生み出そうとするような、抜本的な改革、長期的な変化を伴う地域再生の取り組みの過程の中から生まれてくるシビックプライドのケースで、水俣市や北九州市が該当する。このケースは行政の主導性が全体的に強く、長期的な取り組みのプロセスにおいて随所に行政の関与がある。地域再生が進展する場合には、その中から市民主体の活動が展開することになるが、その場合でも地域再生という枠組みがあるため行政との関係は強い。しかし、市民主体の活動であれば、このような取り組みの中からシビックプライドに類する感情が生まれることも考えられ、そこに行政の意向がどう反映されるかが注目される。

（9）この中には近年注目される地域のアートプロジェクトに伴うシビックプライドの形成も含まれる。ただし、このケースでは、必ずしも地域の固有性とは関係ないアートを付加すること、地域外からのアーティスト等が多くの場合中心的な役割を担うこと等の特徴を持つ。しかし、地域の固有性、地域の価値を尊重し、地域の人々が参加してその特定の地域の文脈の中でアートを中心に共同活動を展開するところに大きな意味を持っているため、bに見るような、活動のプロセスにおいて地域の人々の中からシビックプライドが生まれることも考えられる。

（10）公共圏とは、ここでは、簡単に地域の広い意味での公共的課題・問題に取り

組む活動や、それに関わる人々の関係を包摂する枠組みであり、それを表す一種の観念的な領域とする。

(11) まち育てとは、北上市が実践してきたまちづくりの考え方で、市民が身近な地域資源を発見し、守り育て、発信する活動を通じて魅力ある地域形成につなげようとするものである（北上市企画部都市プロモーション課 *op. cit.*）。

(12) 渡戸（2007）を参照。

(13) 奥田が示した伝統的アノミーモデルは、地域共同体が解体し、地域への人々の帰属意識が弱まり、地域に対する無関心層が多い状態である。また、個我モデルでは、シビルミニマム的な権利意識を自覚した住民、特に新来住層、新中間層、高学歴層、若年層などで構成され、地域は住まいの選択に付随するもので特に意識されることはない。

(14) 渡部（2007）を参照。

(15) 市長はシティセールスという言葉を使っているが、基本的にはシティプロモーションと同義であり、ここでは混乱を避けるためシティプロモーションで統一する。この２つの言葉についての説明は牧瀬（2019：pp.2-3）を参照されたい。

(16) 若者会議の設置目的や運営についての筆者による質問に対する多摩市企画課からの回答（2020年11月17日）より。

(17) 2018年６月の阿部裕行市長の所信表明に基づく（たま広報1329号、2018年６月）。同様のことは、阿部（2019）でも論じられている。

(18) 対象者の選定にあたっては、多摩市役所から若者会議で中心的に活動を行なっているコアメンバー２人を紹介され、そのうちの代表的立場の人を通じて他のコアメンバー３人の紹介を受けた。一般的な参加者も調査対象者に含めたいため、若者会議の拠点となっている未知カフェに集まっているメンバーも加えてインタヴューを行なった。

(19) 自治体が関わる市民参加をある種の動員とする捉え方に対して、それを判断するには参加時点ではなく活動の継続性に着目することが必要であるという主張がある（大畑 2016）。

(20) 反感自体は自発性の現れであると解釈することができると思われるが、このような全体とは異なる意見について分析することも重要である。詳しく分析することで有益な発見が得られることも考えられる。今回の研究ではそこまで追えなかった。今後の課題としたい。

(21) 渡部（2010）は、今田（2001）が社会学の構造機能主義理論が意味を機能や構造に従属する形で扱ってきたことに対する批判として展開した意味論を援用して、地域づくり活動の一つの捉え方として意味・機能・構造という分析

枠組みを提示している。

(22) 他に重要な意味としては、若者会議という場に見出されるコミュニティとしての意味も挙げることができる。

(23) 同様に、幅広い市民参加というもの自体がどのようなものなのか、奥田（1983）の論ずる地域社会の現実の状況を考えれば、現実に現代の地域社会でどれほどのものが実現可能なのか、という根本的な問題も検討する必要がある。

(24) シビックプライドについての認識においても、それに伴う活動への関与においても、市民の中には多様なスタンスがあると考えられるが、若者会議に参加した人たちは、そして実際に調査に応じた人たちは、その中でどのように位置付けられるかについて十分に分析・把握することが必要である。

(25) 渡部（2020）では、英国リヴァプールで開催されたヨーロッパ文化首都という大規模な文化プロジェクトが都市再生に及ぼした影響について、市民や都市再生のメインアクターの認知・精神面という心理学的側面に焦点を当てて論じている。

参考文献

今田高俊（2001）『意味の文明学序説』、東京大学出版会。

阿部裕行（2019）「一人ひとりのシビックプライドと。」（牧瀬稔・読売広告社ひとまちみらい研究センター（編著）『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』）、東京法令出版。

伊藤香織・紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編（2008）『シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする』、宣伝会議。

————（2015）『シビックプライド２【国内編】—都市と市民のかかわりをデザインする』、宣伝会議。

伊藤香織（2008）「シビックプライドとは何か」（伊藤香織・紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編『シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする』）、宣伝会議。

————（2017）「都市環境はいかにシビックプライドを高めるか—今治市を事例とした実証分析—」『都市計画論文集』第52巻３号、日本都市計画学会。

————（2019）「シビックプライドの源泉としての都市環境および諸要素—富山市中心市街地と富山地域を事例として—」『都市計画論文集』第54巻３号、日本都市計画学会。

上野昭彦（2019）「シビックプライド・リサーチへの取組」（牧瀬稔・読売広告社ひ

とまちみらい研究センター（編著）『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』)、東京法令出版。
榎本元（2008）「変わるコミュニケーション」（伊藤香織・紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編『シビックプライド―都市のコミュニケーションをデザインする』)、宣伝会議。
大畑明美（2016）「住民の参加を促す行政の役割」『生涯学習研究e事典』、日本生涯教育学会 http://ejiten.javea.or.jp/contentedbf.html（最終アクセス2020年８月26日）
大堀研（2010）「ローカル・アイデンティティの複合性―概念の使用法に関する検討―」『社会科学研究』第61巻５・６号、東京大学社会科学研究所。
――――（2011）「自治体戦略としての『ローカル･アイデンティティの再構築』」『社会学年報』第40巻、東北社会学会。
奥田道大（1983）『都市コミュニティの理論』、東京大学出版会。
北上市（2017）『北上市都市ブランド推進行動計画』、北上市。
北上市企画部都市プロモーション課（2019）「シビックプライドを軸とした総合的なプロモーション」（牧瀬稔･読売広告社ひとまちみらい研究センター（編著）『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』)、東京法令出版。
合同会社TAO（2019）『平成30（2018）年度多摩市若者会議および若者のまちづくりプロジェクト運営支援業務委託事業実施報告書』、多摩市企画政策部企画課
――――（2020）『令和元年度（2019）年度多摩市若者会議および若者のまちづくりプロジェクト運営支援業務委託事業実施報告書』、多摩市企画政策部企画課
河野哲也（2011）『意識は実在しない：心・知覚・自由』、講談社
杉本浩二（2008）「シビックプライド・プレリサーチ」（伊藤香織・紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編『シビックプライド―都市のコミュニケーションをデザインする』)、宣伝会議。
武田重昭（2015）「都市風景の中のシビックプライド」（伊藤香織・紫牟田伸子監修、シビックプライド研究会編（2015）『シビックプライド２【国内編】―都市と市民のかかわりをデザインする』)、宣伝会議。
高橋克紀（2002）「市民参加像の再興：コントロール理論と公共圏」『公共政策研究』第２巻、日本公共政策学会。
多摩市（2018）「たま広報平成30年６月20日号」『たま広報』第1329号、多摩市http://www.city.tama.lg.jp/0000007080.html（最終アクセス2020年９月１日）。
多摩市若者会議（2017）『平成29年度多摩市若者会議実施報告書』、多摩市企画政策部企画課
西村信哉（2020）「多摩市若者会議～まちの魅力づくりの提案と挑戦」『自治実務セ

ミナー』第692号、第一法規。

林伸二（1999）「自己価値、誇り、自己イメージ-- 自己価値とは何か」『青山経営論集』第34巻２号、青山学院大学。

牧瀬稔（2019）「日本における『シビックプライド』の動向整理」公共政策志林、第７巻、pp.13-26、法政大学

牧瀬稔・読売広告社ひとまちみらい研究センター（編著）（2019）『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』、東京法令出版。

水本宏毅（2019）「論考：シティプロモーションとシビックプライド事業の活かし方」（牧瀬稔・読売広告社ひとまちみらい研究センター（編著）『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』）、東京法令出版。

渡戸一郎（2007）「動員される市民活動？：ネオリベラリズム批判を超えて」『年報社会学論集』第20巻、関東社会学会。

渡部薫（2007）「地域の主題化とソーシャル・キャピタルの形成–意味の視点からの考察」『日本都市学会年報』第40巻、日本都市学会。

――――（2010）『都市の自己革新と文化—ひとつの都市再生論—』、日本経済評論社。

――――（2019）『文化政策と地域づくり—英国と日本の事例から—』、日本経済評論社。

――――（2020）「英国における都市をテーマにした文化プロジェクトと都市再生：リヴァプールの2008年ヨーロッパ文化首都を事例として」『熊本法学』第149号、熊本大学法学会。

渡邊洋子（2008）「伝統芸能という「共有知」とローカル・アイデンティティの可能性」『日本の社会教育』第52号、東洋館出版社。

Bennett, K.（2013）‘Emotion and place promotion: Passionate about a former coalfield’, *Emotion, Space and Society*, Vol.8.

Collins, T.（2016）‘Urban civic pride and the new localism’, *Transactions of the Institute of British Geographer*, Vol.41, No.2.

――――, T.,（2019）‘Towards a more emotional geography of civic pride: a view from an English city’, *Social & Cultural Geography*, Vol.20, No.3, Routledge.

Goffman, I.（1959）*The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company Inc.（＝石黒毅訳（1974）『行為と演技—日常生活における自己呈示—』）、誠信書房。

Hall, S.,（1996）‘Introduction: Who needs Identity?’, in Hall, S. and du Gay, P., *Questions of Cultural Identity*, Sage Publications.

Miles, S.（2005）‘Our Tyne: Iconic Regeneration and the Revitalisation of Identity in Newcastle -Gateshead’, *Urban Studies*, Vol.42, No.5-6.

Wood, E. H.（2006）‘Measuring the social impacts of local authority events: a pilot study for a civic pride scale’, *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, Vol.11, No.3.